
光翼のアレリア

秋野七草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光翼のアレリア

【Nコード】

N7133T

【作者名】

秋野七草

【あらすじ】

王立軍士官養成学校、通称「王立」と呼ばれる国の最上位に君臨する教育機関である。在学生は天才や怪物と称されてもおかしくない実力の持ち主ばかりであり、人々の間では王立に入ることこそが最高であると認識されていた。そして、ここにその王立を「除外処分」になった少年がいた。その少年の名前はアレリア。都市を追われた少年は新しい環境、新しい仲間と共に再起をはかるために再び剣を取る。

序章（前書き）

どうも、このたびは「光翼のアレリア」を連載させていただく 秋
野七草 と言う者です。 今回が初めての投稿となりますので、
処女作、となるのでしょうか？ 初めてということではいろいろと
滅茶苦茶なところがあると思いますが、どうか長い目で見てください。
い。おねがいます。

序章

落選通告

貴殿は王立軍士官養成学校高等部への進学選考から落選したことをここに通告する。

なお、貴殿には中等部の卒業資格は与えることが決定しており、この卒業資格は通常教育機関が発行する資格と同一視することが可能とする。

新しい機関で自らの力をより一層向上させ、我が校の名誉となることを貴殿に期待するものとする。

王立軍士官養成学校校長 レイチェル・

Ｌ・バスク

「…これは…なんでしょうか…？」

僕は紙と教師の顔を見比べながら問う。

「君は高等部への選考に漏れた。一応中等部の卒業資格は与えるが…。単刀直入に言おう。この学校を辞めてもらいたい」

「なぜ…ですか？」

「言っただろう。君は選考に漏れた。故にこの学校を去ってもらう。決定事項だ、異論は認めない」

無情な宣告。僕は体は鉛のように固まった。

「しかし、それでは君も辛かるう。別の学校を紹介しよう。このリストから選びたまえ」

別の紙が手渡される。

紙には『落選者再入学校一覧』とある。

恐れていたことが起こった。しかし後悔してももう遅い。

落選通告。

僕は落ちこぼれ、ということか。

しかし成績はそこそ取れていたはず。なぜだ、納得いかない。

「成績は問題ないはずでは？」

「異論は認めないと言ったはずだろう。そうだな、強いて言うなら今後の成長に期待はできない、ということか」

「…で、ですが——」

「理解できなかったようだ。君は除籍処分だ。猶予期間は三日、それまでに荷物をまとめて寮から去りたまえ。そして明日までにその要項に必要な事項を記入し、持って来たまえ」

「……」

「返事をするのだ！ ヴォルグ！ 命令が聞けんのか！！」

「…はい。わかりました、教官…」

こうして僕は『除外者』と呼ばれるようになった。

。

除外者… 首都に位置する王立軍士官養成学校の高等部の進学選考の際、落選してしまった中等部の内部進学希望者及び退学者等を指す。

なお、ここでの落選者とは外部からの受験者で落選した者を指す。

総じて落ちこぼれ

除外者という不名誉な肩書きは首都では絶対的な力を持つ。

大変言いにくいことなのだが…、この肩書きはいわゆる「追放宣告」なのだ。

この肩書きを持つ者は馬鹿にされ、蔑まれ、そして罵倒される。

首都内のほかの学校にも進学できず、就職すらできない。

故にこの肩書きを持つものは皆首都を発つ。

そしてこの僕も例外ではない。

与えられた三日という猶予期間。その間に都から出ることを薦め

られた。少ない時間だったがどうにか手続きは完了した。

そして今日、僕は発つ。

荷物はまとめた。そして荷物の送り先も指定した。

そして脇に置いてある剣を取り、部屋を出る。

「出発か、アレリア？」

部屋の外には中等部時代の友のエヴァンズが待っていた。

「うん。今まで世話になった」

「そうか……少し、話しても？」

「構わないよ。何？」

僕はエヴァンズの目をまっすぐ見て答える。

対してエヴァンズは目を逸らしながら、

「ほ、本当に行ってしまうのか？」

か弱い声で言葉をつむいだ。

「もう首都ではやっていけない。君も分かってるんじゃないのかな」
だが僕は抑揚の無い声で言葉を返す。

「し、しかしだな……なぜあの様な辺境の学校を……」

「リストの中で王立と同じようなことをしているのがここだけだったんだ。僕にもまだ未練があるからね、やり直したいと思ったんだよ」

そうだ。こんなところで立ち止まってはられない。不名誉な称号一つ、手に入れたと思えばいい。やり直すことはできるはずだ。

「そう……なのか……」

エヴァンズの目に涙が溜まってきているな。その目がうるうると陽光を反射し、輝いている。その姿はまるで幼子のようだ。見ていてこっちが辛くなる。

「じゃあね。機会があればまた話そう」

淡々と言葉をつむいでその場を離れる。エヴァンズから逃げるように、だ。

足早に寮の階段を降り、玄関に出る。

「アレリア！」

しかしエヴァンズの声が響く。走り寄ってくる音が聞こえる。

僕は振り返り、エヴァンズを見据えて言う。

「僕にはもう関わらないほうがいい。君にまで悪いレッテルが貼られてしまう」

「そんなこと―」

「私には関係ない、って言うのはナシね」

「――っ」

黙った。どうやら中っていたようだ。私には関係ない、か。久しぶりに聞くな。

こうして話をするのも悪くはない、がしかし、出発の時間が刻一刻と迫ってきている。さて、どうしたものか…

「…なぜ…お前なんだ…？」

そうしている間にエヴァンズが口を開く。

「なぜ、とは？」

「なぜ、お前が…除外者になるんだ…なぜ…」

…えーと。つまり、「なぜ僕が落選して除外者なんかにならんかちやいけないのか」と言っているんだな。

「それは分からない。高等部の選考の基準は何かが違うのかもしれないね。えーと、落選理由として教官に「今後の成長に期待ができない」って言われたっけ」

「しかし、アレリア。お前は―」

「ごめん。もう時間なんだ。行かなくちゃ」

「アレリア……」

「ごめん……」

僕は身を翻し、馬車の停留所まで向かおうとする。

僕は時計を見る。午前八時二十五分。乗合馬車の出発まであと五分しかない。

足早にその場を離れようとする。

「アレリア、私は…お前のことが―」

エヴァンズが何か言おうとしている。

きつと重要な事なのだろう。

しかし、反射的に思ってしまった。これ以上は喋らせてはいけな
いと。

「——クレア」

だから僕は苗字ではなく名前で彼女に名を呼ぶ。

言っておくが、これまで彼女のことを名前で呼んだことはない。

だからだろうか、エヴァンズことクレアは固まったまま動かなくな
ってしまった。

驚いたのだろうか？ その目は涙が溜まっているが流れることな
く見開かれている。

「今……なんて……？」

驚きながらも必死で言葉を紡ぐ姿を見て僕は ふっ と表情を緩
めた。

「クレア。こうして君と話せて、なんか胸の中がすっきりしたよ」

クレアの頬に涙が伝う。そしてそれが合図だったかのように、溜
まっていた涙が流れ出していく。

「ありがとう」

そう言い残し、僕は歩き出す。

クレアはその場に崩れ、本格的に泣き始めている。

その姿をちらちらと振り返りながら眺めつつ、涙を呑んでその場
から離れる。

そして新しい学び舎に向かうべく停留所に歩を進めるのだった。

序章（後書き）

この小説の製作速度は作者の時間と、テンションとやる気に比例しています。

なのでこの小説の読者の皆様！！ お気に入り登録されてない方は早急に登録してください。

作者のやる気が上昇して執筆速度があがります。

一章 その1（前書き）

長くなりそうなので分割することにしました。

一章 その1

入学式。

学校行事の中で最も盛大な式のひとつである。

式というものには参列者に新しい考えや価値観を与え、参列者同士の時間を共有させる力がある。

時間の共有。

これは俗に友と呼ぶものを作るには欠かせない要素である。

交友関係の構築は学校生活において避けては通れないことであり、いかに関係を構築するかによって、学校生活の充実度が変わってくる。

そしてこれは自分の精神的、肉体的の調子にも関わってくるのだ。

もしかしたら友が自分の能力を向上させる鍵を握っているのかもしれない。

つまり、交友関係を築く、築かないということは誰にとっても重要な問題となるのだ。

もちろん僕にも。

そういうことが目的で参加する者もいるだろう。

僕もそうだ。

やっぱり学校生活は楽しい方がいいでしょ。

個人的な意見だが。

で、今入学式をしているわけだが、

僕は式に参列できていない。現実には思い通りに行かないものだ。

遠くから入学式のために演奏しているのであろう音が聞こえてくる。

僕はただ呆然と直立していた。

「アレリア君：だったかな？」

「はい。そうです」

「座りたまえ」

「はっ」

王立時代のしゃべり方で返事をするものの、緊張しているのだろうか、僕は椅子に腰掛けることができなかった。

目の前には初老の男性がいた。男性は白髪混じりの髪の毛を分けることなく全部後ろにすき上げている髪形をしており、執務机の前で腰を下ろしている。そして鋭い目つきで僕を見据えている。

ただそれだけならいい。

しかし、それだけではなかった。

男性の発している気配、圧力には何か違和感を感じる。

何かを説明することはできないが、とにかく何かだった。

僕は緊張して、固まってしまっただけのものはいるものの、頭は冷静に回転していた。

僕は状況を把握しようとする。

床に敷いてあるものは上質なものとされる絨毯。目の前には豪華な装飾の施してある椅子と机、恐らくは応接用だろう。男性の執務机には資料が山積みになっており、壁には様々な肖像画が掛かっている。

このことから判断できる場所：おそらくは校長室か応接室。

他の肖像画に隠れて見づらいが男性によく似た肖像画もある。

なら、目の前に居る男性は校長ということか。

「私はルベリエと言う。この学校の理事長であり、同時に校長も兼任している」

理事長兼校長だと。ということはこの男性がこの学校の支配者という事か。

「アレリア・ヴォルグです」

背筋を伸ばし、手を腰に添えてはつきりとした声で名乗る。

その態度に満足したかのようにリベリアは頷く。

「まずは謝辞を述べたい。入学おめでとう、アレリア君」

「はっ、ありがとうございます」

その言葉で少し緊張をほぐす事ができた。

ルベリエは机にある一枚の紙を手取る。

「さて、早速本題に移ろう。アレリア君、君は少々特殊な試験方式を利用したそうだね」

ルベリエはその紙を見ながら声を発する。

「特殊、というのは？」

「王立からの特別枠のことだ」

王立特別枠：王立からの編入生、転入生は通常の試験を受けることなく、推薦書と能力証明書と呼ばれる、いわば成績表だけで合否を判定させることができる特別方式であり、不合格になるものは居ない、王立だけに許された特権である。

「その特別枠で入学した君は特待生として扱われる。君は特待生としての役割を知っているかね？」

「いいえ、知りません。その上、それ以前に自分が特待生ということも知りませんでした」

「ふむ」

僕の返答を聞くとルベリエはわざとらしく眉を吊り上げた。

「よいか、特待生は他の生徒よりも能力が突出している一部の生徒に与えられる、称号みたいなものだ」

そのことは分かっているだろうねと聞いてくるので頷いておく。

「特待生の役割は、通常の場合、その学校の進学率をあげることだ。その役割はここでは変わらない」

ルベリエは持っていた紙を机に放り投げる。

「しかし、ここで要求することはそれだけではないのだよ、アレリア君」

ルベリエは椅子に座りなおして言う。

「ここは王立と同じ方式をとっている機関だ。しかし、王立とは目指すところは違うのだ」

「その違いとは？」

「ではアレリア君、王立は何を目指す？」

「軍の士官を目指しているのでは？」

何も考えず、反射的に言う。

「そうだろうな。しかし、ここでは違うのだ」

違う？ 今ある教育機関の殆どは王立を模したものではないのか？

「異常種を知っているかね？」

そんな僕の疑問をよそにルベリエは言葉を紡ぐ。

「…異常種…」

「そうだ、我々の目的はその異常種を単騎で討伐できるほどの力を備えた者を輩出することだ。故に、教育方針も王立とは違う。君は異常種を知っているかね？」

「はい」

異常種、通常の生物の突然変異種のようなもので普通のそれよりも獰猛で強力、そして異様な姿形をしていると聞く。

「実際に見たことは？」

「……ありません」

「そうか…実際に見ているのならば話が早いのだが…」

ルベリエが残念そうに呟く。

「まあよかるう。そのうちわかる」

ルベリエは一呼吸おいて、

「ご苦労だった、アレリア君。教室に行き、新たな仲間と親睦を深めるがいい」

ルベリエが話を切り上げようとする。そういえば入学式の演奏も終わっているような気がする。

「はっ」

僕はまた王立時代の応答をし、部屋から出ようと振り返る。

「待て」

ルベリエの声。

「なんですか、校長？」

「お前ではない……そこで盗み聞きしている者、そろそろ出てきた

らどうだ」

ルベリエが指摘する。ドアの向こう側に誰か居るのか。

僕は腰の剣に手を添える。これも王立で習った動作の一つだ。

ドアが開かれる。

「何時から気づかれてたのですか？」

入ってきたのは青年だ。制服を着ている事からここの生徒だとい
うことが判る。

「その程度の実力で私の目をごまかせると思うか、だと思ふのなら
相当の馬鹿者だな」

「まだ修練が足りませんか」と言いながら青年は歩いてくる。
そして青年は僕の隣に立つ。

長身だ。僕も決して背の低い方ではないのだが、僕よりも頭一つ
分ぐらい高い。

「ただいま到着しました。遅れてすいません、校長」

「遅れすぎだ。話はもう終わっている」

ルベリエは呆れてため息をついている。

「問題ありません。すべて聞いていましたから」

「そうか、本来なら厳罰ものだが、今回は目を瞑ろう」

「ありがとうございます、校長」

青年の態度は堂々としたものだ。校長相手に一切の緊張、動揺が
なく、話をしている。

「こちらの話が終わった所で紹介をしておこう。アレリア君。彼の
名前はレイ。君と同じ特待生だ」

レイと呼ばれた青年はこちらを向き、

「レイ・シュバルツハイムです。よろしくお願いします。アレリア
君」

手を差し伸べてきた。

「アレリア・ヴォルグです」

僕はレイと同じように名乗り、彼の手を取って、握手をする。
「校長」

握手を終え、手を離れたレイは、ルベリエに話しかける。

「なんだね」

「彼女、もう一人の特待生はどこです？ まだ見えていないようですが」

「彼女を呼ぶ必要はない。全てを知っているからな」

「そうですか、ご迷惑おかけしました。では……行きましょう、アレリア君」

レイは振り向きドアへ歩き出す。

「失礼します」

そういつて僕はレイの後に続いた。

。

「ここがそうかな？」

僕とレイは掲示板の前に立っていた。

「そのようですね。どうやらここで間違いなさそうです」

掲示板には大きな紙が何枚か貼られている。その紙を見て辺りから歓声があがっている。

「それにしても人が多いな……。見れるのかな、これ？」

人が多くて全く近寄れない。周りには早く自分のクラスを確認したくてうずうずしている人や少し待って人だかりの規模が小さくなつてから確認しようとする人などが見える。そしてそんな人たちが集まり、通行の邪魔をしている。

「そうですね。今すぐ確認したいというのなら少し無理をする必要がありそうですが、そうでなければその問題は時間が解決してくれるのではないでしょうか」

「レイはどうしたい？ 僕はどっちでもいいんだけど」

「そうですね……。では少し様子を見ませんか？ 場合によっては少し無理をする可能性があります……。まあ問題は無いでしょう」

「そうか。わかった。そうしよう」

「ありがとっござー」

レイは言葉を発しようとしたが、

「あーっ！ いたいた。おい。レイーっ」

という声によって妨げられてしまった。

声の主が遠くから走り寄ってくる。

小柄な体躯に黒い髪。そして腰には小太刀と短剣を挿している――

そんな少女だった。

「……んっ――」

レイは驚いたような様子で固まっている。

そんなレイに照準を定めたように、少女は走り寄って――いや、突っ込んでくる。

猪のように。

そんな異常（？）を目の当たりにして、身の危険を感じたのだろうか、掲示板確認＆通行の邪魔になっていた人たちが散っていく。

確かにぶつかったら痛そうだ。

しかし少女は周りのことなど気にしないとはかりに近づいてくる。とりあえずこっちに被害が及ばないように少しレイから離れて……

っど。

「レイーっ」

少女は跳躍。両手を広げてレイに迫る。

「――っ」

しかしレイは身を屈め、前方に移動することで少女をかわす。

レイにかわされた少女は勢い余って壁に激突しそうになる。

「こんなのでかわしたつもり？」

少女は言う。

「うそだろ……？」

自然と言葉を発してしまう。それほどまでに美しい動きだった。

少女は空中で体を捻る。

そしてまるで猫のように体勢を整えた少女は壁へと近づいていくが、壁に激突する様なことはなかった。

壁と蹴つたのだ。

そして上方に跳躍、再び両手を広げてレイへと突っ込んでいく。

レイは先ほどの回避で体勢を崩して避けることができない。

レイの顔が驚愕に染まる。

対して少女は太陽のような笑顔を浮かべている。

レイフ

「なにを——おおあああああああつ」

レイは顔に似合わない叫び声を上げて倒れる。

いや、正確には押し倒された。

レイは仰向けに倒れていて、その上に少女が覆いかぶさるような形になっている。

「レイ、レイじゃないの！　なんでこんなところにいるの？」

「いや、それはこちらが聞きたいのですが……」

「もしかしてレイもこの学校に、ねえねえ、そうなの？」

犬だった勢い良く尻尾を振ってそんな感じで少女はレイに抱きついて質問している。しかし興奮しすぎているのか、レイの返答を全く聞いていない。

「あの一……レイ……」

「な、
なんで
す？」

レイは少女を引き剥がそうとしつつ返答。

「周りの視線が痛いんだが……」

何処かから怨嗟の聲が聞こえてきて怖いんだが、とも付け加えて言う。

⌋
⋮
⌋

レイは少し固まった後、
げしつ。

「みぎぎつ」

少女を蹴飛ばした。

思い切り蹴飛ばされた少女は空中で一回転し、まるで体操選手のように華麗な着地を決めた。そして少女は腰に手を当てつつ、

「ちょ、何で蹴るのよ！ 危なかったじゃない！」

とレイに向かって言葉を発する。

「蹴っても平気では？」

しかしレイはしれっとした顔で言葉を返す。

「そりゃ平気だけどさ…、でも蹴るのは酷いよ！！」

「離れてくれたのなら蹴ってなどいけませんーていうかまた抱きつかないでください。蹴りますよ？」

「えー、蹴らないでよ」

「だったら離れてください」

レイの言葉使いが心なしに荒くなっているような気がする。

「レイ…彼女は…？」

恐る恐るレイに質問する。

「ん、私？」

だがレイは反応する前に少女が反応した。

少女はレイに抱きつくのをやめ、僕の方を向いた。

「千晶ちあきっていいいます。よろしく」

「アレリアです」

お互いに名前を言い合う。

「ん、アレリア？ じゃあ同じクラスじゃん！」

千晶がそんな事を言ってくる。

「そうなんだ」

一年間楽しくなりそうだ。

「ちなみにレイも一緒のクラスよ！」

「そうですか。それは嬉しいことですね」

どうもレイも同じクラスのようだ。

レイはいつもの微笑に戻っている。

だがレイよ、汗が噴き出ているぞ。

「じゃあクラスが判ったことだし、行きますか」

こんな所でまごついても仕方が無いので、僕はそう言って彼らの一歩前に出る。

「行きましようか」

「行こ！」

そして二人も歩き出す。

そうして僕たちは教室へと向かうのだった。

一章 その1（後書き）

この小説の製作速度は作者の時間と、テンションとやる気に比例しています。

なのでこの小説の読者の皆様！！ お気に入り登録されてない方は早急に登録してください。

作者のやる気が上昇して執筆速度があがります。

一章 その2（前書き）

だらだらした内容になってしまった気が……
すいません

一章 その2

「日本系移民？」

「うん。私はそう呼ばれた一族の末裔よ」

僕たちは廊下を歩いていった。僕とレイが横に並び、千晶がその前をこちらを向いて歩いている。

校舎は中世風な造りで、生徒が着ている近代的な制服の対比がなにも言えない雰囲気をかもし出している。

「私の目の色や髪の毛とかから判るだろうけどね」

確かに千晶は癖の無い黒色の長い髪をしていて、茶褐色の目をしている。どれも日本人に見られる特徴だ。

大和撫子…か弱いながらも、凛々しい所が有るという意味の日本女性の美称。らしいが、千晶の場合は背が低く、童顔という事から凛々しいというよりも、可愛らしいという表現が合っていると思う。

「アレリア…」

レイが耳打ちしてくる。

「…彼女に小さい、やそれと同義の言葉は禁句です。絶対に言わないで下さい。絶対に…」

「…わかった。気をつける…」

何故こうも念押しされるのだろうか。もし言ったら何が起ころのだろうか。…やめておこう。これ以上の詮索はいろいろとヤバイ事に巻き込まれそうだ。

「んで、アレリアだっけ？」

千晶が口を開く。

「ん、そうだけど」

「あなたって前衛？ それとも後衛？」

「？ 何のこと？」

「授業のことよ。どっち取ったの？」

授業。この学校には「戦闘技術」という授業がある。この授業は

大まかに前衛用と後衛用の二種類に分かれていて、それぞれ入学時に選択する必要がある。

そしてこのときの選択が将来的な自分の戦闘スタイルを決めることになる。

「ああその事か、僕は前衛を取ったよ」

「そうなの、私も前衛よ」

千晶がこちらに笑顔を向ける。まるで太陽みたいな、見ていて幸せな気分になんてくれるような笑顔だ。

「前衛ってことは演武があるわね。アレリア、そのときは一緒にやりましょう」

「機会があれば…ね」

あの身のこなしから判断するに勝てそうにないのだが…

あんなトリッキーな動きに対応できるのか、いやできない。と反語風に自問自答してみる。

「レイはどうなのよ？ 前衛？ 後衛？」

「私が前衛をすると思いますか？」

「だよー」

レイは後衛なのか。

「後衛って事はレイは弓を使うのか？」

弓の後方支援が無ければ前衛は前に出ることができない。相手を牽制し、相手が警戒して前に出てこなくなる。その結果、戦線を上げることができる。必要な職だ。

「いいえ、私はどちらかといえば弓よりも魔術を使います。しかし、後方支援という点で言うのなら、役割は一緒ですがね」

「魔術！？ 君は魔術師なのか？？」

「ええ、広義ではそのような扱いになるのでしょうか。厳密に言う^{サモナー}と召喚術師と呼ばれる職です」

召喚術師、通常の魔術師とは違い、精霊を召喚し、その精霊の力を借りて魔術を行使する異端の魔術師と聞いている。

「そう驚くことでも無い気がします…」

驚きっぱなしの僕を見てレイは疑問に思っている。

この世界には魔力^{マナ}というものが存在する。

人間は通常、空気中に漂う魔力を自身の魔力に変換、又は自身の魔力で魔術を行使する。

前衛だつて、肉体強化と言われている魔術を使う。

しかし、それはあくまでも自身の肉体を強化するだけであり、現実世界の物理的法則の枠を超えて発現させるものではない。

一般的な、火の玉を作り出したりするような魔術は違う。

これらは物理法則を歪め、世界に発現させるが、

人々はなぜ、発現させることができるのか、なぜ、物理法則を歪めることができるのかということを知らないのだ。

全くのブラックボックス。

人々はそんな原理が分からない力を使っている。

そのためか、魔術を使う際、歪める法則の程度によって消費される魔力が変わつてくるといわれている。

そして、人の持つ魔力には個人差がある。さらに、体外の魔力を自身の魔力に変換する能力も才能が関わってくる。

極めつけは、その双方を兼ね備えた者はほとんどいないという。故にその力を自由に使えることができる魔術師は希少な存在とされている。

「いや、驚くだろ……普通」

王立でも適正があつた人はほとんどいなかった気がする。

「それって魔術師の適性があるってことだろ……、参考に聞くが、適性審査のランクはどうだったんだ？」

この国の国民は魔術師適性の検査を受ける義務がある。そして、その適性はA〜Fで判定される。ちなみにCからが『魔術師の適性あり』とされている

「Aでしたよ———ってどうしましたか？アレリア？」

「なんか心が折れたよ……」

うなだれる僕。

すると、千晶が

「そんな落ち込む必要はないと思うよ？ 私はFだし」

という言葉をかけてくる。

ちなみに僕の適性はDだ。

魔術師の才能はないと言う千晶だが、その体術でその低い適性をカバーしているとは思えない。

カバーできることがあるっていいよね。

「なんでこんなに落ち込んでるの？」

「……もう放っておいてくれ……」

テンションが違う三人。高い順から千晶、レイ、そして僕。

「あのー二人とも……」

レイが声を上げる。

「……なんだ？」「なに？」

僕と千晶は同時に返事をする。

「教室はそこなのですが……」

「……」

どうやら通り過ぎていたようだ。戻って少し行った所僕たちの教室の物と思われる標識がある。

「あれー、すっかり見落としてたよ。ありがとっ、レイ」

テンションが低く何も言わなくなっている僕の代わりに千晶が礼を言った。

そして「じゃあ、入りましょ」と千晶は僕たちに先駆けて教室に入っていった。

「……入りますか」

「そうですね」

僕とレイはそんな千晶の行動につられて教室へと入っていった。

○

「えー、では、これからHRを始めます」
ホームルーム

担任がHRを淡々と進めている。

自己紹介、学校の理念、そして、このクラスに求めるもの、と順に語っている。

学校の理念に関しては、ルベリエが話していたような内容ではなく、ただ、王立の真似事のようなもの、つまり、表向きの理念を語っていた。

僕の席は窓際の列の前から二番目、窓から暖かな陽光が降り注ぎ、眠気を誘っている。

千晶は僕の後ろの席だ。僕の視線に気づいたのか、こっちに向かって小さく手を振ってきている。

レイは僕たちと結構離れた所に座っている。風が吹き込み、ブロンドの髪が揺れる。そして、前髪を掻き揚げるような仕草をするが、その行為が妙に高貴さを漂わし、周辺の女子の視線が集まる。

さながらアイドル、と言った感じが。

「では、各々自己紹介をしてもらいましょう。では出席番号順で、お願いします」

先生が話を進めている。それにしても腰の低い先生だ。王立だったらほぼ確実に命令形なのに、この先生の言葉にはそんな強制力は無い。

「はい、私は――」

自己紹介が始まる。

緊張している人もいるが、僕はそのようなことは無く、ただ、機械的に自己紹介を済ませる。

「アレリア・ヴォルグです。首都から来ました。よろしくお願いします」

周りからどよめきが起こる。一体僕のどの言葉に反応したのしたのだろうか？

疑問に思いながらも席に着く。

「鳳千晶おおとこりです。私も首都から来ました。よろしくお願いします」

またどよめきが起こる……なるほど、彼らは「首都」に反応して

いるのか。

どこか聞いたことの無い地名を答える人もいた。

しかし、首都のような大都市を答える人は殆どいない。

レイの番が来る。

「レイと言います。皆さん、よろしくお願いします」

キラン。

「『『『きや ああああああああああああああ
ああああああ』』』」

レイの時だけ反応がおかしくないか？
特に女子。

先生がおろおろしながら「し、静かにしてください!」と言っているが、女子は聞き入れる様子は無い。

「レ、レイさん。好きな食べ物——」「今度一緒に食事でも——」

「あっ、ずるい。私も——」

○

それどころかレイは質問攻めにされている。

これは收拾するのに少し時間がかかりそうだ。

自己紹介が終わる。

結局、首都出身者は僕とレイと千晶だけだった。

その他は、行ったことがあるどころか、名前すら聞いたことの無い町の出身の人までいる。

田舎は都会を夢見ると言うが、その通りなのかも知れない。

(初々しいな……)

そう思ってしまう。僕はそんな初々しい、未来を夢見る事などやめてしまったから。

無意識にため息が漏れる。

何もかもが王立と違う。教師も、生徒も、全て。

こんなことを思っているとつくづく自分が形はどうあれ、王立の出身者なのだと感じてしまう。

真新しい制服、真新しい武器。

全ての光景を王立と対比してしまう。

そんなことを考えてばーっとしていると、

「アレリア、アレリア……」

千晶が後ろから肩をつつききた。

どうやら考え込んでいたらしい。

「悪い……」

僕は短く答え、意識をこちら側へ呼び戻す。

えーっと、何々……

黒板を見る。

黒板には短く「戦闘試験」と書いてある。

え？

「急なようですが二日後、試験を行います。と言いましても試験会場はすぐそこにある山ですけどね」

まじで？

「成績はこれからの指導の参考になりますので、皆さん、頑張ってくださいね」

……。

「言い忘れていましたが、試験は最高五人のチームを組んで、受けてもらいますから」

「では」と先生は教室から出て行ってしまった。

当然の事のように辺りがざわつく。

最高五人のチームか……、最高つて事は別に五人じゃなくてもいいんだよね？

「千晶、組む？」

何も考えず当然のように千晶を誘う。

「ん？ いいよ」

快く了承してくれた。

とりあえず一人目ゲット。

次は後衛でも誘うか。

後衛と言ったら、今現在、レイとしか面識がないのだが……

まあ、一部女子から熱烈なアプローチを受けている訳であって……
「ねえ、レイ君、私と組まない？」「えーっと「違うわよ、レイさんは私と組むの」ですね、私「何勝手なことを！！組むのは私よ！！」は——って、話聞いてますか？」

聞いてない。と変わりに言っておく。

名づけて「レイ争奪戦」ってとこか。どんどんぱふぱふーっと。

「こ、困ります。落ち着いて——」

「レイ、先行ってるからねーっと」

今の状態でレイを誘おうとすると周りの女子に殺されかねないので、レイには自力で抜け出してもらおうということで。

「アレリアっ、千晶っ——」

「ごめん、レイ。私まだ死にたくない」

千晶も同意見のようだ。

僕と千晶は教室を出た。

そういえばこの学校には特待生の為の部屋が用意されている。

下見を兼ねて見に行こう、っと。

「レイには既に伝えてあるから大丈夫よ」

千晶もそう言っているので大丈夫だろう。

。

結論から言うと、ちゃんとレイは部屋に来了。

体力バーがあるならば残り三十パーセントぐらいにはなっデッドラインてそう
なぐらい疲れているように見えるが気にしない。

「疲れました」

レイの一言。声からはそんなに疲れを感じさせないが、よく見ると制服が変な感じになっている。

無理矢理逃げてきたのだろうと容易に想像できる。

とりあえず僕と千晶は揃って「お疲れ」と声をかけておく。

レイは重たそうな足取りで席に着く。

「んで、どうなったの？」

千晶が話しかける。

「何の話ですか？」

「ほら、女子に絡まれてたじゃない？　一緒に組もうとかどうかって」

「そのことですか…」とレイ。

「どうやら軽いトラウマにでもなっているらしい。思い出したくないのかもしれない。」

「断りました。あそこで選んでいたら選ばなかった皆さんに申し訳ありませんからね」

「ふーん、じゃあ今フリーなんだ……」

ふふふーと千晶が不敵な笑みを浮かべる。

「じゃあこの三人で組みましょ」

「まあ、もとよりそのつもりです」

レイ、快諾。

「決定、かな？」

「はい、決定です」

「決定ね」

「じゃあ、この三人で申請するとして……」

僕は言葉を止めた。

なぜならば……

『レイ君、私と組んで』 『レイ様~~~~~』 『ワタシと組むといことあるかもっ、ふふ』 『わわわわ——』 『邪魔よあなた。レイさん、私と組んでいただけ——って邪魔って言うてるでしょ、下がりなさい——』

「……………」

こんな感じで女子が押しかけているわけで。

「レイ、つけられた？」

「……すいません。そのようです」

……はあ。

「お先にっ」

千晶が窓を開けて外に飛び出す。

そしてその手には申請書類が握られている。

「アレリア、レイ、あとはよろしく」

そういつてどこかへと走り去ってしまった。

僕とレイは互いに顔を見合わせる。

「逃げますか」

と僕。

「逃げましょう」

とレイ。

そして二人は外に飛び出した。

そしてそのまま逃走を開始する。

まだ、日は高い。

長い一日になりそうだ。

二章 その1（前書き）

区切れるところで区切りましたので、とても短くなっています。
すいません

二章 その1

『あー、えー、これから試験を始めたいと思いますが、皆さん、準備はよろしいですか？』

先生の声が聞こえてくる。この間延びしていてやる気の無い感じ、うちのクラスの担任だな。

『えー今回はですね。実践を想定した戦闘試験です——』

眠い。それにしても眠い。

ピリツとした雰囲気の中、僕だけが欠伸をして、ボーっとしている状況だ。

この二日間、睡眠時間など、無いと言っても良いのではないかな？ 睡魔が僕を夢の世界に誘っている。しかし、寝てはいけない。寝てはいけない理由があるのだ。

辺りを見回してみ。

一応出席番号順に並んでいるので、後ろには千晶が立っている。

千晶は前が見えないのか、その場でジャンプしている。

その際に僕の肩に手を置いて跳ねるのはやめていただきたい。

レイは後ろのほうに立っているが、近くの女子にまた言い寄られている。

しかもレイは全く嫌がる様子をすることは無く、笑顔で対応している。

絶賛人気上昇中、と。

まあ男子は反対の反応をレイに示しているが。

ほら、妬みとかいうやつだ。

羨ましいんだろうね。

因みに僕の場合なんだが、僕はレイと千晶とチームを結成したわけだが、

どうもそれが女子の怒りに触れたらしい。

心なしか視線が痛い。

千晶も同種の視線が向けられているはずなのだが、本人は全く気にしていないようだ。

「なあ、千晶」

僕は前を向いたまま、千晶に話しかける。

「ん？」

千晶は飛び跳ねながら応答する。

「視線気にならないの？」

「全然。慣れてるし」

いや、慣れてるって…

「ん、なに？。もしかしてアレリア、この程度でびびってるの？」

千晶が口を^{こんなかんじ}ωにしている。

「……まさか」

僕も苦手ではあるが、耐性が無いわけではない。王立は常にそういうプレッシャーに晒されていたからね。

「ふゝん」

何気ない反応だが、その言葉の中には疑問が内包されている。

「そういえばさ、アレリア」

「ん？」

「あんたって、特待生だったわよね」

「…一応ね」

「じゃあさ、どこの出身なわけ？」

「……は？」

「いや、何の基礎もできない初心者を特待生にするわけないでしょ。特待生になるぐらいならどこかでその技術を身につけたんでしょ。

じゃあどこで身につけたの？」

「い、いや……それは……」

言えない、言える訳ないだろ。千晶は首都出身だ。ならもちろん「除外者」の事だって知っているはずだ。

王立出身だと言ってみる。間違いなく三年間、暗い学校生活を送らなければならない。

「どうしたの？」

「いや……」

しどろもどろになりながらも必死に言葉を捜す。

「昔、少し齧ったことがある程度だよ。」

どうだ…こんな感じの答えで…

「ふん。そんなもんなのかあ」

千晶はそう言って追求をやめた。危ない危ない。

『——では、解散して各自準備に取り掛かってください』

千晶とそうこうやり取りをしている間に説明が終わってしまったようだ。

レイがこちらへ向かってくる。

その歩いている姿はまるでどこかの貴公子かのように凛々しい。女子の前を通り過ぎる毎に黄色い声援があがっている。

「お二人とも、準備は？」

僕たちの前に立ったレイは開口一番、そんなことを聞いてきた。

「問題なっしんぐ。いつでもいけるよ」

千晶が陽気な声で返事をする。

腰には二本の小剣が差しており、肩には数本のナイフが差してある。苦無くないというやつだろうか。

まあ、どちらにせよ準備万端ってことか。

「僕も大丈夫。何時でもいけるよ」

腰に差してある剣を軽く叩きながら言う。

因みにこの剣は王立にいた頃の支給品で、本当なら変換義務があるのだが、教官の厚意で今手元にある。

中等部にいた頃から使っていた物なのでそれなりに愛着がある。

「そうですか。もうすぐ試験開始なので」

「わかった」

短いやり取りの後、レイは人ごみの中へ消えていった。

「もうすぐ試験なんでしょ？　じゃあ固まっていた方が——」

千晶はそう言ってレイを追いかけるが、言葉を全て紡ぐことはな

かった。なぜなら――

「邪魔よ」

という声と共に突き飛ばされてしまったからだ。

「きゃっ」

千晶は声をあげて尻餅をついた。そしてそんな千晶を嘲笑うかのように、

「あら、ごめんなさい。小さすぎて見えなかったわ」

という声が聞こえてくる。さっき邪魔って言ったのは誰なのやら。千晶を突き飛ばしたのは女性だ。背は高く（千晶に比べれば）整った顔立ちで、どこことなく豪華な感じがする。

「そう」

千晶は立ち上がり服を叩いている。その物言いから判断出来るが相手にする気はなさそうだ。

「あらあなた、もしかして鳳さん？」

「……そうだけど」

「へえ、あなたが……」

まるで汚いものを見るような視線が突き刺さる。

千晶を突き飛ばした女性は嘲笑うような態度を変えない。

……気に食わないな。

「千晶、体は？」

千晶の側に寄る。

「大丈夫よ、アレリア」

千晶は軽く答えるが、様子から、注意は女性に向いているようだった。

「その男子、あなたが彼女のチームメイト？」

その様子を見て、女性が話かけてくる。

「……そうだけど」

「へえ、あなたが、ねえ」

まるで品定めをするようにじろじろと女性は僕を見てくる。

「ねえ、あなた。私と一緒に来ませんか？」

……。

「は？」

今何て言った？

「理解できていないようですから言い直しましょう。私たちとチームを組みなさい。今からでも遅くはありません」

……。

「どうですか？」

「ごめん、君と組むことはできない」

「…それは、どうして？」

女性我问う。

「僕は、彼女―千晶たちと組むことを決めたから。そんな勝手な考えで違える訳にはいかない。だから、僕は君と組むことはできない」

「…そう」

女性は笑う。

しかし目は笑っていないかった。

女性は僕を千晶を見ると同じような視線を向けてくる。

「あなたは、私ではなく、その穢れた日本人を選ぶのですか…」

「……何を言っている？」

「……そうですか。ならいいでしょう」

女性は振り返り、

「私はメルティア・アルベーン。私は、あなたたちを認めない」と言い、そして、

――でも、もし、気が変わったら、何時でもいい。私のところへ

そう付け加えてどこかへ行ってしまった。

呆然とする僕のそばにレイが歩み寄る。

「アルベーン、ですか…。厄介な家に目を付けられましたね」
そんな言葉が僕の頭に響いたのだった。

二章 その1（後書き）

この小説の製作速度は作者の時間と、テンションとやる気に比例しています。

なのでこの小説の読者の皆様！！ お気に入り登録されてない方は早急に登録してください。

作者のやる気が上昇して執筆速度があがります。

二章 その2

「レイ、アルベーンについて教えてくれないか？」

「アルベーンですか、分かりました」

時間が時間なので僕、レイ、千晶は固まって、試験開始の時を待っていた。

僕は地面に腰を下ろし、千晶は近くの倒木に座っている。

レイは腰を下ろすことなく木にもたれかかっている。

大体半分ぐらいが既に試験を開始しており、終わって帰ってきているグループも確認できる。

「いいですかアレリア、アルベーン家というのは副首都に居を構える貴族の一つです。」

その爵位は伯爵、副首都には公爵家や侯爵家も多数ありますが、アルベーン家はその爵位の差に関係なく、公、侯爵家並みの発言力を持っています」

「その発言力には何か理由が？」

「はい。アルベーン家は副首都で『純血主義』を唱える貴族の一党の―盟主とも言いましょうか、とにかくその一党の中心となっている家なのです」

純血主義……

「つまり日本からの移民である千晶の存在が許せないと」

「そうです。彼らの最終目標はこの国にいる全移民、及び全混血の排除です。ここまで言えば分かるでしょう」

「教育の賜物だね」

「全くです」とレイは肩を竦め、

「しかし、変ですね」

興味深い事を呟いた。

「変？」

「ええ」

レイは頷く。

「この学校は『誰であつても等しく機会を与え、その力を伸ばす』という理念を掲げています。」

これは人種や言語に関係なく、という意味です。

故にここには様々な人々が集まります。そしてそれは純血主義が最も忌み嫌うものの一つであり――」

レイが言葉を紡ぐのをやめる。

「――そんな所に大事な娘を入学させるのはどこか変だ、ってことよ」

そして代わりに千晶が答えた。

「レイ、これは何かありそうよね？」

千晶は続けてレイに質問する。

「ありそう、ではなく、あるでしょうね」

そう答えながら、レイは木にもたれかかるのをやめ、服についた汚れを掃う。

「現時点では何とも言えませんが、これは調べる価値がありそうですね。分かりました。私も気になりますし、少し探ってみましょう」

「よろしく」

千晶はそうレイに言い、椅子代わりにしている倒木から腰を上げる。

「私も自分なりの方法で調べてみるわ、レイは表から、私は裏からってことで」

「わかりました。では裏はお任せしますが、決して無理をなさらないように。いくら学生の所業といつても、家柄が家柄ですし、発覚すると面倒なことになりますから」

「わかつてるって」

千晶はあくまでも軽い物言いで答える。

因みに僕は何が裏で何が表か全く分からないので、ただ呆然と、その場で彼らの会話を見守っている。

それにしても、ずいぶん手馴れているように思える。確かに彼ら

が既知の間柄なのは分かっている。けど、様子を見る限り、日常的にやってきたとしか思えないぐらい手際がよい気がする。

「ん、どうしたの、アレリア？」

疑問に思っている僕の様子を見てか、千晶が話しかけてきた。

「いや、手馴れてるなって思っ

率直な意見を口にしてみる。

すると千晶は、

「あー、うん。小さい頃によくやってたのよ。ほら、両親の会話をこっそり聞いてみたリね。そのせいだと思う」

と、なにかをはぐらかすように答えた。

そんなことで身につくのか、と疑問に思ったが、

「ふーん」

適当に頷いておく。

そのうち分かるだろう。多分。

「さて、そろそろ私たちの番です。改めて装備の確認を」

レイが促す。

「ほら、向こうで監督員がそわそわしています。彼が怒る前に行きましょう」

「了解」「ほいほい」

千晶は走り出す。

その元気な姿を見ながら歩を進める僕の横にレイがつく。

「元気だね」

「まったくです。まあ私はその彼女と幼い頃から親交があるので慣れてはいますがね」

レイは「やれやれ」と肩を竦め、

「あの元気に付き合わされては、体がもちませんよ」

困ったように言う。

ふと疑問に思う。

困っている素振りはしているが、どこか、本心での行動だとは思えないのだ。

隠している？

何のために？

疑問は膨らみ、頭の中を埋め尽くす。

何も知らない者ならば、彼の表情は本物だと疑うこともしないだろう。

だが、僕は違う。

分かってしまう。

そして、同時に思い至る。

彼には、自分の本心を話せる相手が必要だと。

「本心は？」

だから、僕は聞く。

「僕は本当に君が困っているようには見えない。どこか昔を懐かしんでいる。そんな気がするから」

悪いが、その仮面は外してもらうよ、レイ。

「僕の前では、ありのままを言えがいい。」

隠すのは勝手だ。けど、そうやって本心を偽り続けるのは、君にとっても、僕にとっても、あまり気持ちのいいことじゃないしさ」

レイは少しはにかんだ表情のまま、参ったとばかり両手を挙げて、
「まったく、貴方にはばれてしまうんですね」

そっと、前方を走る千晶を眺めた。

「本当に、彼女は昔から変わらない」

まるで子供を見守る親のような顔をして。

その瞳の中に全てが内包しているように見える。

「さて、まずは謝罪を。貴方は他の方とはどこか違うようだ」

「よく言われるよ」

「そして、感謝します。私も貴方の前では、自分を偽ることを止めることにします」

そう言って、レイは僕に笑顔を向ける。しかし、その笑顔はいつもの張り付いたような社交的な笑顔ではなく——まるで、友達に笑いかけるような、心の底からの、そんな笑顔だった。

。

「面白そうなことをしているな」

男が言った。

男は窓枠に体を預け、外を見ている。その先には試験会場があり、生徒たちが、泥や汗に塗れながら戦っているのが見える。

しかし、男はその光景を見て、楽しんでいるのではなかった。

彼の瞳には三人の生徒が写っている。

一人は小柄で長い黒髪の少女。

一人は長身のブロンドヘアーの少年。

そしてもう一人、その少年と一緒に歩いている少年。

男は「ほう」と短く呟き、後ろを向いた。

光源は窓から降り注ぐ太陽光だけだったので、部屋は暗くなっている。

男は視線がある場所に固定する。

そこには人が立っていた。

初老の男性だ。白髪交じりの髪を後ろにすき上げる髪型をしている。

「お体はもう大丈夫なので？」

「大丈夫でなければこんな所には居る訳がないだろう？」

「そうでございますか」と現れた男は呟き、窓際まで歩いていく。

「確か、王立出身が新入生で一人いたな？」

窓際の男が問う。

「はい。アレリア・ヴォルグのことでございましょう」

「資料はあるか？」

「ここに」

男は懷から資料を取り出し、パラパラとそれを捲っていく。

「除外処分となっていますが、やはり王立、能力は一般生徒とは比べ物になりません。しかし、特待生である他の二人と比べてみます

と……平均ぐらいですか。特に抜き出ている訳ではなさそうです」

「そうか……お前はと思う。あくまで個人的な意見で、だが」

初老の男性は考えるような仕草をする。

「彼に注目するよりは、他の二人に注目すべきだと思いますが」

「根拠を聞きたい」

「はい。彼ら二人は優秀な人材を多数輩出してきたこの国有数の名家であるという点で判断いたしました」

「確かに、妥当な判断ではある」

男は肯定する。

「だが、俺はその無名の少年にこそ目を向けるべきだと思うがな」

「理由を、お聞かせ願います」

「彼は、人の本質を見抜く力があるのかもしれない」

「と言いますと？」

初老の男性は訝しげな表情をする。

その様子を見ながら男は言葉を紡ぐ。

「さっきそこから彼らを見ていたが、シュバルツハイムが心を開いたようだった。最後にはまるで本物の友達だと認識したかのように振舞っていたよ」

「仮面を外していたと？」

「そうだ。彼にはこのように文章化、数値化できない何かを持っているのだろうな」

「この短時間で……理解し難いですな」

「だが事実だ。受け入れる、ルベリエ」

ルベリエは黙り込む。

「どうなさるので？」

しばしの静寂のあとルベリエが口を開いた。どうやら黙り込んだのは思考するためらしい。

「ま、今のところは様子見かな」

男は窓枠から離れ、扉へ向かって歩き出し、
「ちよっと出てくる」

そう言いながら男は扉を閉じた。

ルベリエだけが部屋に残る。

ルベリエは窓の外を眺めながら、

「では、私も様子を見させていただきますしうかな」
嬉しそうに呟いた。

二章 その2（後書き）

この小説の製作速度は作者の時間と、テンションとやる気に比例しています。

なのでこの小説の読者の皆様！！ お気に入り登録されてない方は早急に登録してください。

作者のやる気が上昇して執筆速度があがります。

二章 その3

「では作戦の説明を」

「作戦なんか立てる必要あるの？」

「……ま、まあ一応……とりあえず念頭には入れておいてほしいのですが……」

「備えあれば憂いなし、って言うしね」

「ふん。わかった」

「という事だ。説明してくれ、レイ」

「わかりました。まあ、作戦とは名ばかりで厳密に言いますと『緊急時にどう行動するか』についての取り決めですがね」

レイが「こほん」と咳払いをする。

「私は後衛、千晶は遊撃、そして貴方は——前衛というところですかね。千晶は主に私を護衛しつつ隙あらば敵陣に潜入し、敵を攪乱していただきます。一方貴方は敵に斬りこみながら、千晶の潜入ルートを確保していただきます」

僕が囁いて何か……？

と、いうことは、

「僕の行動がその後の展開を左右するのか……責任重大だな」

「上手く立ち回ってくれないと私もやり辛いからね。頑張って、アレリア」

にこつ、と太陽のような笑顔を向けてくる千晶。

「ははは……頑張るよ……」

苦笑いしかできないアレリアであった。

「さて、では始まりますよ。準備はいいですか？」

「三班、早く来なさい——」

試験官が吼えている。急がないと、

「そつよそつよ——！ 二人とも早く——！」

「え！？　なんで千晶が！？」

「これが千晶クオリティよ」

「どどん、と胸を張って言う千晶。千晶クオリティ？」

「気にしたら負けですよ？　彼女はそういう存在です」

レイがため息をつきながら意味深な事を言ってくる。しかしアレ

リアは、

「はあ」

とyesともnoとも言える中途半端な返事しかできないのであった。

そして三人が試験官の前に立ったところで、

「まったく、お前たちは……まあいい。試験を開始するぞ」

試験官が呆れながら告げる。

「注意として言うておくが、会場の要所要所に監視の為に上級生が配置されている。彼らが試験続行不可能と判断した場合、その時点で試験は終了になるから、気をつけたまえ。まあ、お前らは問題ないだろうがな」

「三人とも特待生だろ？」と付け加え、

「さて、では開始だ。健闘を祈る」

試験開始の合図を告げた。

。

「前方に敵を視認！！　数は三！！　先行するわ！！」

千晶の声が森に響き渡る。

三人は木々に囲まれている道なき道を進んでいく。

千晶が先行し、アレリアがレイを守るように付き添って走っている。

森を始めとする視界が悪い地形の場合、最も怖いのが奇襲だ。木々や物陰に身を隠し、虎視眈々と獲物を狙っているのだ。奇襲をされたとしても、前衛―つまり近接戦闘用の装備をしている者ならば、

ある程度は対応できる。しかし、レイは後衛、つまり敵に近づかれる事を想定していない。その装備は前衛のそれと比べれば紙同然だろう。

だからそれに対応するために護衛をつけるという意でアレリアが隣についているのだ。

千晶は遊撃ということで今はレイの護衛をアレリアに任せ、前方の敵に向かっている。

アレリアは敵を見る。千晶が敵に気付かれないよう接近しているので、台無しにしないように少し距離を置いてはいるが、充分にその姿は確認できた。

その姿は……虫……のようだった。

頭部は小さく、細く短い触覚を持っている。胸部、腹部共に長く、前足は発達して鎌形になっている——カマキリのようなのだ。

普通のカマキリの何ら変わらない——違うのは、大きさだけだった。

その大きさは、アレリアたちのそれと大差ない、気がする。

近づくのは危険そうな相手だが、幸いなことに今はお食事らしく、こちらの存在は気付いてない。

喰われているのは同じ様な、大きさが規格外の虫だった。

一匹の骸に三匹の巨大カマキリが纏わりついて、その身を貪り食っている。

千晶が音もなく近づいていく。

まるで這うように、滑るように敵に寄って行く。

その手には二振りの小太刀が握られていた

千晶はその足を緩めることなく巨大カマキリの後ろに回りこみ、音もなく飛び上がる。

「合図です」

レイの声が聞こえてくる。

瞬間、アレリアはその速度を上げ、巨大カマキリに向かっていく。大きな足音、隠すことない気配と共に。

「何事か？」とでも言うかのように巨大カマキリ共が、その頭を上げる。

その視線、注意は全てアレリアに向いている。
これでいい。アレリアは心の中で呟く。

キシヤアアアアアアアア……

カマキリたちが揃って咆哮をあげる。

その咆哮は「食事を邪魔された事による恨み」と、「新たな栄養を見つけたことへの喜び」の二つを意味しているのだろう。

巨大カマキリはこちらへ向かおうとする。しかし、

――直後――

三匹の中の一匹、その頭部が音を立てて吹き飛んだ。

ブシュと体液が飛び散る。

そして頭部を失った体は、まるで糸の切れた人形のように、ストンと地面に崩れ落ちた。

新たな気配の発生により、暫時停止する残りの巨大カマキリ。その隙を逃すまいと抜剣、そして二匹のうち一匹に突進する。

標的をアレリアに絞った巨大カマキリは、捕まえるためであろう、その鎌状の前足をすばやく振ってくる。

しかし、アレリアの方が早かった。

掴む対象がなく、虚しく空を切る前足。

カマキリの視線が下へ動く。

そこにはアレリアがいた。隙をついたのが功を奏し、間一髪で懐に入り込むことができたのだ。

アレリアは突進の勢いを殺すことなく、その剣を後ろへ引く。

アレリアの目はカマキリの、長く、発達している胸部へと向いていた。

「ふっ」

という、息遣いと共に放たれる攻撃。

突き出された剣は、見事に、カマキリの胴体に突き刺さった。体液が飛び散り、苦悶に満ちた咆哮が聞こえてくる。

しかしアレリアの攻撃はこれだけでは終わらない。

アレリアは体を捻る。その動きに連動して剣が巨力カマキリの肉を抉っていく。

その動きのまま剣を両手に持ち、横に薙いだ。

剣がカマキリから離れる。同時にアレリアは足を踏み出し、距離を開ける。

距離を開けたアレリアは振り返り、様子を見る。

その姿は凄惨なものだった。

敵の胸部には穴が開き、切り傷が横へと広がっている。

支えることができなくなった首の部分が、その重さに負け、地面へと落ちた。同時にその胴体も力を失い、倒れる。

剣を振り、付着した体液を払う。

千晶の方に視線を向けるが、丁度、最後の一匹を始末したようだ。一匹目と同じように頭部がなくなり地面に横たわる。

「おやすみ」

アレリアはそう言いながら剣を剣帯に納める。

周囲に静寂が訪れる。

戦闘は勝利という結果で終了したのだった。

「すばらしい戦いでしたね。見惚れてましたよ」

レイがこちらへ向かってくる。

「知り合って二日目にしちや上出来でしょ？」

小太刀を納めた千晶がこちらへ歩いてくる。

巨力カマキリ二匹を相手にしていたはずなのに、疲労の色は見えない。

疲労を感じさせぬ笑顔を振りまきながら二人と合流する千晶。

「あれって倒したことで何かメリットあるの？」

合流するや否やそんなことを聞いてくる千晶。

レイは「開始前に説明してましたけどね」と呟きながらため息をこぼし、

「あの巨力マキリは大体3点位でしょうね。聞いてないようなので説明しますが、巨力マキリを始めとする肉食の虫状生物は一匹につき3点。草食は1点。駆除するたびに加算されていきます。動物型もいるようですが、新入生では危険、ということなので今回の範囲では巣の密集地帯は含まれていないようです。

対人戦も許可されています。対人戦では、相手グループを倒すことでボーナスとしていくらか加算されるようです。その加算具合は、それまで彼らが稼いだ点に関係するようです。

なお、対人戦の場合、両者が傷つかないための特別処置として『守護魔法』は発動されます。

これのおかげで、たとえ斬りあつたとしても死ぬことはありません。しかし、守護の範囲はあくまでも『肉体的損傷に限る』らしいので、痛みなどは遮断されないようです。

勝敗の判断は監視作業中の上級生の方がやってくれるようです。保護も同様に、です」

「肉体的な損傷の遮断か……これなら安心だね」

「同学生間のみ適応される、という制約付きのようですがね。だから上級生が配置されているんでしょう。万が一の事は起こらないとおもいますよ。恐らく監視は万全のはずです」

「そっか。わかったわ。ありがとっ」

千晶必殺(?) 太陽の笑顔。

「どういたしまして」

しかしレイはたじろぐことなく対応する。効果はない様だ。

「じゃあ敵を探すね」

千晶は走り出そうとする。

「あ、待ってください」

がレイが呼び止めた。

「どつたの？」

疑問を口にしながら千晶は戻ってくる。

レイは腰のポーチから一冊の本を取り出す。

「効率を上げるために彼らの力を借りることにしましょう」

彼らの力を借りる。つまりなんらかの召喚術を行使するということか。

では、一般的に考えて、レイの持っている本が何なのか、恐らくはその手法とかが書かれた魔術書の類なのだろうということは容易に想像がつく。

「詠唱とかするの？」

「多少の例外はありますが普通は行います。そもそも詠唱というのは術式を組み立てるための方法です。詠唱することなく組み立てることも可能ですが、『召喚』に関してはその術式が普通の魔術よりも複雑なために詠唱を行わなければならないのでしょーうね」

「説明はいいからさっさとやってよ」

千晶が口を開く。痺れがぎれたのだろう。

索敵に行こうとするのを止められたのだ。無理もないのかもしれない。

「分かりました。ではいきます」

レイは承諾し、本を開く。

レイは深呼吸をし、本を構える。

空気が変わる。

あたりに魔力が満ちていく。

今まで召喚術を見たことがないアレリアは、一言で言ってわくわくしていた。

ただの魔術なら今まで何度も見たことはある。

王立の訓練でも魔術が飛び交うのが普通だった。

しかし、王立でも召喚術師は特別視サモナーされており、通常とは違う、別プログラムの授業だったために、アレリアは会った事がないのだ。

——来い——

レイの詠唱が始まる。

風で本のページが捲られていく。均一の速さで、一ページずつ。そしてある時それが止まった。

不可思議な光景だ。

レイの呼びかけに本が呼応しているとも言うのか。

それは、彼の体の一部にでもなったかのような錯覚を生み出させる。

——我が名はレイ・シュバルツハイム——

——我と契約せし者よ——

——我が呼びかけに応じ、今ここに顕現せよ——

本が光を発しだす。

神秘的な光だ。強く、優しい。様々な何かが内包されたような光。それが本より溢れ出し、辺りを包む。

よく見ると描かれている文字が発光しているようだ。

——風を統べる者よ——

——偉大なる風の霊よ——

この言葉で判った。レイが召喚しようとしているのは風精霊だ。

風精霊は四大元素の一つである「風」操ることのできる精霊だ。

周囲に風が吹き荒れる。

反射的に目を細める。

普段、方向性も何もないように思われる風だが、このときはそうではなかった。

明らかにその方向性を持っている。

風が、一箇所に集まっている。レイの目の前、そこに風の球みたいなものが形成されていた。

風の球の中に何かが蹲っているような、そんなシルエットが浮かび上がる。

「来てください——アリエル!!」

レイが唱える。直後、風球は飛散し、暴風が吹き荒れた。

暴風のせいで舞い上がった砂埃から避けるために、腕で目を覆う。しかし、外へ行くように風が吹いてくれたので、幸いながらすぐに目を開けることができた。

目の前に何かがいた。

尖った耳、亜麻色の髪、そして透明な羽。

大きさは人の頭よりちょっと大きいぐらい——が宙に浮いている。俗に言う「妖精」という奴だろう。

「レイ……これは……?」

感激のあまり、声が漏れる。疑問形で。

その質問に対して、レイはその妖精を肩に寄せ、昔からの親友を紹介するかなのような口調で、

「ああ、彼女は風精霊——シルフのアリエルです」
と言うのだった。

二章 その3（後書き）

ついに戦闘シーンが！！ 戦闘シーンを書くときは、なぜか分かりませんが筆がどんどん進みます。

二章 その4

「ああ、彼女は風精霊——シルフのアリエルです」

レイはその妖精を肩に乗せ、昔からの親友を紹介するかのような口調で言った。

「風精霊^{シルフ}……、四大精霊を召喚するなんて……すごいじゃないか」

「そうでもないですよ。彼女は、正直言って戦闘には向きませんから」

レイは申し訳なさそうに言う。

「四大なの？」

「四大でもです。人間に向き不向きがあるように、精霊にもあるのですよ」

レイは「精霊も人間と大差ないのでしょ」とも付け加える。

肩に乗っている妖精——もといアリエルはレイの言葉を聴き、はにかみながら手で後頭部の部分をさすっている。

「彼女が得意なのは索敵です。やろうと思えば周囲数キロの様子も探れるはずですよ」

風で探るのですよ。詳しい原理はわかりませんが」

「本人に聞けばわかるんじゃないの？」

千晶が口を開く。

「だな。どうなんだ、精霊さん？」

アレリアはその後こんなことを思った。精霊って喋れたっけ？と。

そーっと、視線をレイにずらす。

「彼女は喋れますよ。安心してください」

こちらの意図を理解して、レイが述べる。

アレリアは額の汗を拭い、

「そうか……、でどうなの？」

今度こそ精霊に視線を向ける。

『アリエルでいいわ。

そうね、私もわからないわ。体感的では解っていても、理論的ではわかってないわ』

外観に似合わない凜とした声が響く。

アリエルはレイの肩から飛び上がり、アレリアの前に立つ。

『……あなた……』

「ん？」

『……いや、なんでもないわ』

どうしたんだ？ と首を傾げるアレリア。対してアリエルは何か疑問を抱えたような難しい顔でレイの方へ戻って行った。

「では、そろそろ仕事をしていただきましょうか」

レイがアリエルに呼びかける。

『わかったわ』

短い返答の後、アリエルは空高く飛び上がる。

そしてある高さまで上がったところで、大きく手を広げた。

途端、木々がざわめき始める。

風が木々の間を走っているような感覚。

指向性のない風がアリエルの指示に従い、吹いているのだった。

まるで獲物を求める猟犬のように、

まるで指揮者に導かれ、優雅に演奏する楽団員のように、

優しく、力強い風が。

風がやみ、アリエルはレイの元へ降りてくる。

「どうでしたか？」

アリエルに向かって霊が口を開く。

『んー』

と言って木々の間に向かって指を差すアリエル。

『あっちの……開けた場所。そこに誰がいる。あなたが言ってる監視員じゃなさそう。戦ってる——』

「恐らくは生徒間の戦いでしょう。気にする必要はありません。他

には――」

『いや、違うわ』

レイの言葉を遮る。

「どうしたんですか？」

『これは……一方的な……』

アリエルは歯切れ悪く言う。

「詳しく」

『一方が一方的に他方の攻撃を受けているわ……、どうももう戦意はないみたい。けど――』

「それでも戦いは続いていると……」

レイが呟く。その声の低さはルールを守らないことへの怒りの表れか。少なくともアレリアにはそう感じられた。

「しかし、ありえない……監視員がいるはず。そのようなことは起こらないはずだ……」

「ねえ、アリエル」

アレリアが口を開く。

『なんででしょう？』

「なにか、喋ってないか？　どんなことでもいい、何かヒントはないのか？」

『……』

アリエルは目を瞑り、小さく両手を広げる。

その間に千晶に視線を向ける。

千晶はアレリアをじつと見た後、

「わかったわ」と小さく頷き、土を蹴り、森へと入っていった。

「アレリア、何を？」

「千晶を先行させたただけだが？」

「なぜ？　その必要は――」

「レイ、君の疑問についてはその精霊が答えてくれるさ」

その場は暫時静寂に包まれる。

レイは少し俯き、

「アリエル。どうなのですか？」

『……悪意に満ちた場……飛び交う言葉は……』

アリエルは語りだす。言葉は文章にはなっていないが、アレリアはその言葉の断片を頭の中で組み立てていく。

『……憎しみ……怒り……』

（怒り、憎しみ。負の感情か？）

『……選ばれた者……真の民……』

（選ばれた者、真の民……選民思想——！？）

『……純血……』

（選民思想、そして純血……）

「思ったとおりだ」

謎は解けた。選民主義、そして純血。これらが意味するものは、
「純血主義。やつらだ」

断言する。

レイが驚きと疑問の入り混じった表情でこちらを見てくる。

「いいか、レイ。純血主義の目的は移民の排除だったな？」

この試験では合法的に対人戦が許可されている」

「しかし、殺害することは不可能なはず……」

「それはあくまでも生徒間での話だ。

じゃあ生徒じゃなかったら？」

「どういうことですか？」

まさか、とレイはこちらを見てくる。これからアレリアの言う内容があらかた想像できているのだろう。余計なことは言わず、ただ、静かに、アレリアの言葉を待っている。

「奴ら、生徒を虫の餌にするつもりだ」

二章 その4（後書き）

次回からは戦闘シーン盛りだくさん（の予定）
ご期待ください。

お気に入り登録、感想などをいただけると幸いです。
誤字脱字の指摘もお願いします。

三章 その1

アレリアとレイは道なき道を全速力で走っていた。

アリエルはレイの肩に乗って道を示している。

「つまり、監視員もグルってことだ」

「なるほど、それなら納得もいきますね」

普通の、何の技術のない者たちだったら絶対に再現できないような速度で進む。

アレリアの周りには仄かな燐光が漂っている。

これは魔力の光だと、レイはすぐに思い至った。

通常、人が魔力^{マナ}を使用する際、そのすべては施行される魔術に使われる。しかし、今回のアレリアの場合でも言える事だが、生成する魔力に対して消費する魔力が少ないと、余剰な魔力が体外に排出され、使用者の周りを照らす形になる。

今回の場合はアレリアがレイに速度を合わせているからであり、そのことをレイは申し訳なく思っていた。

アレリアならば、恐らくは今よりも更に速度を上昇させることが可能だろう。

しかし、レイには肉体強化術についてあまり詳しくない。前衛用の魔術自体、あまり知識はないのだ。そもそも召喚術は遠距離職であり、今のように肉体強化術を使うことなど想定されてない。さらに、今現在レイはアリエルを召喚、使役しているために、肉体強化術を充分に制御できないでいる。これらの理由からレイはアレリアと同等の速度を出せないでいた。

「レイ」

不意にアレリアが口を開く。

「千晶に伝えたいことがある。連絡をとる事はできるか？」

レイはアリエルに目配せする。アリエルは頷き、

『一方的にならずにでも。向こうの言葉も伝えることができるけ

ど』

「必要ない。今は敵に見つからない事が重要だ」

きつとアレリアは千晶が声を出してしまうことを恐れたのだろう。なぜならば一般的に言われる、潜入する上で最もやってはいけないことは「敵に気付かれること」だからだ。単独ではなおさらだが、敵陣真っ只中に突っ込むのだ。見つかったらタダではすまない。

『わかったわ。で、なんて伝えたらいいのかしら？』

「最初に監視員を狙え、と伝えてくれ」

『わかったわ』

「なるほど。変に介入される前に潰しておくということですか」

監視役が純血主義だった場合、おそらく行ってくるのは理不尽な理由での介入だ。こんな状況の介入だ、こちらは不利益を被るに違いない。故の判断だろうとレイは考えた。

「そうだ」

短く答えるアレリア。その顔に感情が浮かぶことなく、文字通り無表情となっている。

思い返してみると、状況が逼迫するにつれてアレリアのしゃべり方が普段のそれと違うものになっている気がする。

ただ余裕がなくなっているだけなのか、普通ならそう思うだろう。しかし、レイにはもう1つの要因が考えられた。

それは一般的に感情封印術と呼ばれている。

感情封印術は戦闘に不必要な感情を封印し、非常な戦闘マシーンに自身を近づける術だ。

人は極限状態に陥ると、精神に過度の負担をかけることを避けるために無意識的にこれに似た状態になると聞いたことがある。

しかし、今の状況はそうではない。

少なくとも関わろうとしなければこちらが被害を被ることはない。そんな状況でもその状態になるとしたら、

（それは環境適合などではなく、人為的な何かによるものですね）
レイは考える。

自分の意思でその状態へと進むことができる。その術が存在する
としたら。

その術を無意識に使うことのできるとしたら。

レイは頭を振るう。

深く考えても仕方がない。

今は目の前のことだけ考えよう。

そう思いながら歩を進める。

『そろそろ目的地ですが、かなり状況が逼迫しているようです。
それと、少し離れた所に何かいます』

「何か？」

『今の状態では何とも言えません』

「そうですか。どちらにせよ、急がなければならないことには変わ
りないようですね」

レイは言葉を区切り、アレリアに目を向ける。

「先行してください。私もすぐに追いつきます」

「わかった」

アレリアは短く呟く。

レイは再びアリエルに視線を向け、

「私たちはその何かに向かいます。アリエル、行きますよ」

『わかったわ』

そう言っ、レイは方向を変えて森の中に消えていった。

対してアレリアは道をそのままにその速度を上げ、目的地に急ぐ。

「

」

不意に声が聞こえてくる。

罵声だ。憎しみのこもった声が辺りに響き渡る。

「

」

まずいな、とアレリアは直感した。

そこにいるのは二人の女性。

一人はその煌びやかな金髪を振り乱し、手に握っている棒状の何

かを叩きつけている。

一人はそのボロボロになった体を引きずって、必死に金髪の女性から遠ざかるうとしている。

その髪、服には泥が付着していて、その怯え様から、普通の状態ではないことは容易に判断できる。

（気絶寸前か）

淡々と状況を把握する。

もう何時意識が飛んでもおかしくはないだろう。精神的にも、肉体的にも、もう限界だとアレリアは考えた。

アレリアは腰の剣帯から剣を抜く。

金属が擦れ合う特有の音が周囲に響き渡る。

走る速度を上げる。それと同時に辺りに溢れていた燐光が消えて行く。

それは使われず、ただ辺りに放出されていた魔力がすべて消費されている証拠。

腰を落とし、剣を構える。

向かうは森を抜けた先。

起こるであろう惨劇を止めるためにアレリアは進む。

踏み出すのを躊躇わない。

「行くぞ」

誰もいない中、ただ自分に言い聞かせるために呟く。

そしてアレリアは森の先へと駆けていった。

。

森の先では二人の少女が戦っていた。

そのうちの一人、金髪の女性——メルティアはその槍を一心不乱に振り下ろしていた。

その目は血走り、息は荒い。

まるで何かに取り付かれたかのように、もう一人にひたすら罵声

を浴びせている。

その声は試験開始前に、アレリアたちと話していたものとは違うものだった。

酷くしわがれ、抑揚なんてものは存在しない。

ただ獣のように、その感情をぶちまけている。

「……うっ……」

対して——メルティアの猛攻に晒されている少女は、泥や傷に塗れた体を引きずり、必死にその槍を防いでいた。

手に握っている剣は刃毀れし、折れかかり、もう剣としては機能しないであろうと思われるぐらいの有様になってしまっている。

「……もう……やめて……」

少女に戦闘の意思はない。ただ、この苦痛が終わることだけを望んでいた。

そもそも、彼女がメルティア一行に戦闘を仕掛けた訳ではない。

少女の一行がただ黙々と点数を伸ばしていたところにメルティアは現れ、攻撃を仕掛けてきたのだ。

しかし、それは決して違反ではない。むしろそういう要素を持った試験だということを彼女は理解していた。

監視役はちゃんと存在して、勝敗を告げ、行き過ぎた事は起こらないと思っていた。

しかし、そんな考えはすぐに泡と消えた。

どれだけ待っても、どれだけ叩きのめされていても、仲裁なんてものは入らない。

攻撃されても死ぬことはない。これは絶対なものだと思われる——普通ならば。しかし、どんなに完璧だと思われる事であっても抜け穴は存在する。

現在、少女には守護魔法の救済のおかげで『死』は訪れない。しかし、これは同時に絶え間ない拷問が可能であることを意味していた。

今回生徒全体に施された守護魔法は「勝敗を決める」という特性

上、痛覚の遮断は行われない。メルティアはその抜け穴を利用したのだ。

その抜け穴を埋めるために監視員が配置されていたのだが、どういう訳か機能していない。

何故かはわからない。少なくとも少女にはもう、何も考える力は残っていないかった。

「やめてあげてもいいわよ……貴女が眠ったらね!!」
更に激しさを増す槍撃。

メルティアの槍を受ける度に悲鳴を上げる剣。

メルティアの声と、槍と剣が重なる音だけが聞こえる。

足はもう動かない。いや、足だけではない。全てが動かない。だんだんと意識が遠のいて行く。

剣を握る手が緩み、弾かれる。何処へと消え去る剣。

メルティアの顔が狂喜に歪む。

槍を振り上げる。

「あ……あ……あ……」

少女の口から声が漏れる。

全てを認めたくないばかりに、これは夢だと自分に言い聞かせるように。

しかしそれは叶うことはない妄想。

現実はある。

「お眠りっ!!」

槍が振り下ろされる。

反射的に目を瞑る。

次に目を開いたとき、目に映る光景が自分にとって嫌だと感じるものでなければいいなと願いながら。

しかし、意識がなくなることはなかった。

金属がぶつかり合う音が聞こえる。

「なっ——！？」

メルティアの声が聞こえる。

その声は酷く驚き、上擦っている。

何が起こったのか？ これは自分の意識がなくならないことに関係があるのか？

そう考え、そつと目を開く。

「……………え？」

目に写ったのは自分達を襲った金髪の女性ではなかった。

男だ。後姿しか見えないが体つきから判断できる。

男はその赤みがかった髪を靡かせながら、剣を振り終わった体勢のまま、メルティアと少女の間に立っている。

誰だ？ それが少女の率直な感想だった。

思いがけない外野の介入によって少しは心に余裕ができたのか、その程度のことは考えることができるようになっていた。

男は無言のまま残身を解き、メルティアと向かい合う。右手には剣を握っている。その剣は装飾性の高い煌びやかなものではなく、よく軍で兵士が使っているような実用性に重きを置いたもののようにだ。

メルティアは驚いた表情のまま、不自然に槍を持っている。おそらくはこの男が弾いてくれたのだろう。

「あなた……………どうしてここに……………いや、なんでここが……………？」

メルティアは驚きの表情のまま驚きの言葉を口にする。

それに対し男は無表情に近い表情のまま、

「君たちが何をやるうとしてるのか、知ってしまったね。どうでもいい内容なら無視してもいよかったんだが、どうもそういうものでもなさそうだし。」

メルティア、どういいうつもりだ？」

「いえ……………それは……………その……………」

「……………」

男は無言のまま相手を見つめる。

「——くっ、マリア、シヤステイ!!」

メルティアは後ろに跳び下がり、困惑した表情のまま叫んだ。

その声と同時に男も同様に後ろへ飛び下がり、少女の隣に立つ。

先ほどまで男が立っていた場所には、一本の矢が突き刺さっていた。

「アルベーン嬢!!」「お嬢様!!」

メルティアの下に駆け寄る二人の少女。一方は小回りが聞くであろう小型の弓を持っていて、もう一方は右手に剣を持っていて、体の要所要所を鎧（おそらくは皮製だ）で覆っている。

「後衛一人に前衛一人追加か」

男は呟く。

男は三対一という戦力差が出来ているにも関わらず、その表情を歪める事はない。

「アルベーン嬢、彼は？」

革鎧を着た少女がメルティアに話しかける。

「彼は……」

「誰でもいいですよ、シヤステイ。お嬢様を襲う不貞の輩を排除するのが私たちの役目ですよ。誰であっても、敵は敵です」

メルティアの返答を妨げたのはもう一人の、弓を持った少女だった。革鎧の少女は構えを解いてメルティアの傍にいるのに対し、この少女は矢を番え、男を睨んでいる。

「それもそうか……アルベーン嬢、彼をどうなさるおつもりで？」

「……」

「お嬢？」

「シヤステイ。お伺いする必要はないわよ。彼はお嬢様に剣を向けている。その事実だけで充分」

「そうだな……おい、その男」

革鎧の少女は男に意識を向ける。

「悪いが、そういうことだ。私にはお嬢様を守る義務がある」

革鎧の少女、シヤステイは剣を正眼に構え、

「だから……ここで、倒れろっ!!」
男へと突っ込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7133t/>

光翼のアレリア

2011年11月14日03時22分発行